

令和7年度第2回さいたま市アーバンスポーツ研究会 議事録

- (1) 開催日時 令和7年8月27日(水) 15:00～17:00
- (2) 開催場所 さいたま市大宮区役所2階大会議室(201・202会議室)
- (3) 出席者 岩原委員(副会長)、鎌田委員、小林委員、佐藤委員(会長)、
田中委員、橋本委員、松田委員
欠席者
- (4) 議題 ①第1回研究会での主な意見及びさいたま市の今後の取組案
について
②三橋総合公園北側市有地の整備について
③公民連携について
- (5) 公開・ 公開
非公開の別
- (6) 傍聴者の数 0人
- (7) 会議資料 ・次第
・資料1 さいたま市アーバンスポーツ研究会委員名簿
・資料2 さいたま市アーバンスポーツ研究会設置要綱
・資料3 第1回研究会での主な意見及びさいたま市の
今後の取組案について
・資料4 三橋総合公園北側市有地の整備について
・資料5 公民連携について
- (8) 議事内容
① 開会

② 議題-(1)
第1回研究会での主な意見及びさいたま市の今後の取組案について
■ 資料説明
事務局より、資料3に基づき説明
■ 意見交換
【佐藤会長】

前回の研究会でご意見をいただいて、本年度の内容に修正したものになっている。何か意見はあるか。

【田中委員】

スラックライン等の実施に当たり、関係者がいない状況があり、非常に危険な状態だったため、その対策としてパフォーマンスできる講師を配置すること、或いは安全を確保するための人を配置し、かつパフォーマンスや競技の魅力紹介を流すとの説明があった。そこもとても大事なことだが、体験者にはではなく体験者となる前の人にも安全な設置の仕方などを関係者にきちんと認識をしてもらうことがとても大事で、関係者へ設置の仕方の説明があれば、安全にできると思う。スラックラインの台が動いたり、ゴムマットが引いていないなどの状況があったことから、指摘させてもらったので、その対策もあると良い。

【佐藤会長】

やはり安全の確保ということと、危険の排除ということは、言葉の意味では同じだが、実は、違う活動になるため、安全を作ることと危険なものを取り除くという2つの側面で見えていかないと、どちらかを落としてしまうこともあると感じた。

【鎌田委員】

アーバンスポーツはBMXやインラインスケートのようなギアと言われるものを使うケースが多いため、事前のメンテナンスなどは専門知識がある方が行う。スラックラインの設置に当たっても、ラインのテンションをしっかりと判断できる人がいる。ローラースポーツにおいて、実施場所の状況や部品不足などが転倒けがの原因になるため、それぞれの専門知識がある方や総合的に判断ができる人間が、事前にチェックを行うことと同様に強化すれば、けがを防いでいけるのではないかと。

【佐藤会長】

そういったことをやってくださる方には、相当な専門知識が必要と考えるが、何らかの形で関わっていただくショップの方を増やしていく方向性を持っている中で、今のお話は、ショップの方に参加していただける良い機会となるか。

【田中委員】

車などと一緒で「乗る前点検」みたいなことが重要で、そのためのチェック項目があれば、最低限のところ担保され、安全に体験できる。使用できないものに関しては、専門のお店でケアをするが、専門的な方はそこで初めて登場すれば良いので、そうした知識がない方でもその手前でできることはある。

【鎌田委員】

アバスポさいたまで「事前に1回みんなチェックをしよう」という機会があれば、参加される方たちが自ずと取り組むときに気をつけて見るようになるのではないかと。いずれ自分のギアを持ったときも、そういう意識があれば、どこか悪いなと気づくきっかけになるのではないかと。

【佐藤会長】

2番目の話題と少し絡んでくると思うが3ページ目で、新見沼大橋の下の話題があったが、何か意見はあるか。

【小林委員】

行政側で普及啓発の看板の設置やインタビューの配信と書いているが、それはあくまで守って欲しい側からの発信でしかない。広告などで発信するだけでは、それが実際使う方達に届いているのか分からない。施設を使う方達に、「ルール・マナーを守らないと、ここは使えなくなるよ」「外から見た印象が悪くなるよ」と呼びかけてくれている方の存在が、その地域でのその施設でのマナー向上にすごく結びついてくる。有名であろうとなかろうと、「親しいお兄ちゃんの言うことを聞く」みたいところが結構あるため、施設を使う人たちのコミュニケーションを密にさせていただくことは項目としては付け加えていただきたい。

【佐藤会長】

新見沼大橋有料道路高架下を使っている方々を把握する術はあるのか。

【事務局】

既存のD区画につきましては、所管の都市公園課から、現地確認し、頻繁に利用している人から意見を聴き、どう反映していく意向と聞いている。今回のJ区間については、まずはフラットなものを整備し、利用する人から「実はこういうような形で使えると良いな」という声が出てくれば反映していく考えに少し軌道修正したい。また、両区画は対象が異なることから、予定どおりの区画への整備を進めていきたいと考えているが、整備後に隣接を望む声が多くなるようであれば、可能な限り対応していくなど、より良く使ってもらえるように発展的にやっていければと考えている。

議題- (2)

三橋総合公園北側市有地の整備について

■ 資料説明

事務局より、資料4に基づき説明

■ 意見交換

【佐藤会長】

前回の意見を見ていただき、これをブラッシュアップしたり、或いは逆に削ってしまったたり、何か意見をいただきたいと思う。先ほど小林委員から利用する人たちと先に関わっていきながら考えていくべきという意見があったが、新見沼大橋は、D区画を利用している方と少し関わっているが、三橋公園の場合は、地元の方との関わりを最初の段階で築けそうな感じはあるのか。

【事務局】

今のところ近くのショップが見つかっていないため今後の検討にはなる。

【松田委員】

三橋総合公園は、体育館や室内プールなどスポーツ施設が充実しているため、そういうものを利用する方たちにもうまく周知できたら良いのではないか。

【鎌田委員】

三橋総合公園の近くに地元のショップ等がないのであれば、松田委員も言ったことや、橋本委員の所属している青少年育成さいたま市民会議といった地域との連携を図っていくことはすごく大事だと思う。小林委員が言った

ように、既存の事業とつなげていくことも重要だが、ショップが関わっていくことでコア層が中心になる可能性もある。逆に一般の層や初心者・子育て世代の層を巻き込んでいくのであれば、入りやすい環境を作っていくために、アバスポさいたまやスクールキャラバンという活動が大事になるのではないか。幅広い視点で、あそこのエリアを捉えた方が、より地域の方が入りやすい環境を作れるのではないか。

【佐藤会長】

どんなに良い組織を作っても、そのコアな人たちの事業があっても良いしそれだけではだめだということか。

【鎌田委員】

それぞれの地域の方たちと連携していくようになれば、地域理解が深まり、アーバンスポーツに対する理解も深まってくる。そうしていくことで、地域の方にも使用したいと思ってもらえるような場所になる。反対意見が多いより、「ここがあってよかったね」と理解をされる場所にしていくことが大事だと思う。

【佐藤会長】

「セクションとしてクォーターランプが両端にあるとそこを使ってスピード感ある滑りができるかも、バンク、ハーフボックス、フラットレールがあると良いかも。」という意見が前回あったが、一連の流れの中では、コアな方々の施設の色が強くなっていくのか。

【松田委員】

ちょっと上達してくるとやってみたいなという感じになる。

【田中委員】

次のステップにいくときに使うようなものという認識かと思う。

【佐藤会長】

敷地の広さとしては、設置できるスペースはある。目指している方向性はコアな方だけではなく、導入の次のステップぐらいの方々がやりたくなるような内容ということか。

【鎌田委員】

動かすのが大変なもの置くとエリアもそこまで広くないため、圧迫感も感じることもある。そういうものが今後必要になってきたときは、先ほど申し上げたとおり、そういう場を今後どう考えていくか議論していければ良いと思う。

【佐藤会長】

「3 on 3用のバスケットゴールを設置すること等で、アーバンスポーツを目的で来なくても、アーバンスポーツに触れられるきっかけをつくる」という意見が前回あったが、少し多目的化していくようなことか。

【鎌田委員】

これは大変かもしれない。柵の高さをどうするか、水路を考えるとボールがなくなるリスクがある。

【佐藤会長】

ボールが水路に落ちてしまう可能性もある中で3 on 3というキーワードが出てきたが、多目的性を残しておくという文章の後半部分の意図は残すこと

で良いと思う。「パークのようなセクションが揃った施設があれば良いが、まずは行政の取組としてフラットな面の整備だと思う。」ということで、具体的なことは設計の段階で詰めていく。

「ルール・マナーの普及啓発を目的の一つとした場合、利用ジャンルごとの取りまとめとスクール・体験会は不可欠。使う人たちのコミュニティの創発・育成を。」ということで、ここでアバスポさいたまを実施して、ルール、マナーの普及啓発ということにもなってくるのかと思う。また、先ほど小林委員からもあったが、早い段階で使う人たちと関わり、良い意味で自分たちのもの意識を持っていただくということか。「ルール・マナーの啓発の観点から使用一時停止のルールを定めておく。」ことについては、市の施設であるため、市で可能かどうかといったところになってくるかと思う。「隣接する公園の駐車場やトイレの行き来で道路を横断したり、滑走しないような注意が必要。」ということで、これは特に重要なポイントだと思うが、アイデアはあるか。

【鎌田委員】

アバスポさいたま・スクールキャラバンという活動をしている中で、伝えていくことが大事だと思う。「みんながアーバンスポーツできる環境ができますよ、その上でそのルールとしてはこういうルールがありますよ」と伝えていけば、それを分かった人たちが集まってくるようになると思う。そういう形にしていくことで、防げるものも出てくるのではないか。

【小林委員】

鎌田委員が言ったように、ツールとしてさいたま市は揃っている。三橋総合公園周りに小学校が5、6か所ある。三橋総合公園の中やイオン大宮で、完成を待たずにアバスポさいたまを開催し告知する。楽しみにしていた子たちが、いよいよオープンするときルールをちゃんと説明する機会を作るのが大事で、とりあえずオープンしてみしてから使う人に注意するよりは、できる前に今からでも、アバスポさいたまやスクールキャラバンを使えば仕掛けを作っていけるのではないか。そこは、来年度のソフト事業計画に、戦略的に入れたら良いのではないか。

【佐藤会長】

オープンしてから伝えるのではなく、オープン前から伝えていき、わくわくしてもらいつつ、最初からちょっとずつ刷り込んでいくことが大事と言うことである。

【小林委員】

ルールが分かっている利用者が多いところは、利用者間で注意してくれるため、そういうサポーター的に動いてくれる良いユーザーが最初からいると、行政の手間がすごく少なくなる。

【佐藤会長】

小さいときからルールを守ることと運動の両方を教えてもらった子は、もしかしたら守り続けるのではないかというイメージがあるが、どうか。

【小林委員】

今のアーバンスポーツを取り巻く環境で言うと、もうメインターゲットは利用者そのものじゃなく子育て世代の親。親が施設のルールを理解して、自分の子どもに注意してもらえるか、目を離さないで自分の子を見てもらえる

かがすごく大事。どちらかという、行政から使用ルールを親に言ってもらおう。

【田中委員】

場所ができる前に、アバスポさいたまなどの中で伝えられることはたくさんあるが、すでに競技をやっている人たちはアバスポさいたまには来ないので、場所ができた後に来てくれた時に伝えるしかなく、小林委員が言ったように、保護者たちにきちんと理解してもらう必要がある。テスト運用を実施し、利用できなくなることがあると理解していただき、この場所をみんなで育てていくみたいな認識になると良いかと思う。

【小林委員】

今の田中委員の話でもあったが、コア層と一般層を分けるような話が出たが、仲間を増やしたいと思っているコア層が一番貴重。普及活動に意欲的なコア層がすごく貴重なので、そういう方が三橋や新見沼大橋のところで見付き、協力していただける糸口が見つかるが良い。ルールを守らなければ自分の子が晒される、炎上すると思うと危機感を感じる方たちもいるので、メリットやリスクをしっかりと伝えてあげることが大事。

【佐藤会長】

今の有益なコアの方々が3番目の議題の公民連携に向けて、探していく、広げていく対象になると思う。「業者の看板設置を認め、その費用を運営費用等に充てることはできないのか。」という意見があったが、広告看板は構わないのか。注意書き看板は問題ないか。

【事務局】

調整はしていないため、なんとも言えないが、注意書き看板は問題ない。

【松田委員】

その他のところで、「計画地にどのような形で誘客するか、定期的なスクールなども検討。」という意見があったが、道具を持っている人限定になるのではないか。道具を持っている＝初心者ではないと思う。道具を所持、購入してもらう方法がある程度考えないと、ここに来てくれる人は限られてきてしまうのではないか。どうしたら欲しいと思ってもらえるか、買ってまでやりたいと思ってもらえるかというのも、スクールキャラバンやアバスポさいたままで、子どもたちに伝えるなどの方法があれば良いと思う。定期的なスクールを春学期に毎週土曜日4週間連続で行い、だんだんレベルアップして、最終的に自分の道具が欲しいと思ってもらえたりする方法を考えていけたらどうか。

【田中委員】

三橋総合公園での定期的なスクールというのも、自分の道具をまだ持っていない人たちが来るイメージで良いのかと思う。そこでの定期スクールも、こちら側から道具を用意して開催し、自分のギアを持ちたいと思う子たちが増えるイメージ。貸し出しはなく、競技者だけ集まれみたいな形だと、ハードルが高くなり、参加できない人や、やりたくてもできない人も出てくると思う。

【鎌田委員】

アバスポさいたまやスクールキャラバンで、アーバンスポーツがいかに楽しいかを、参加者に伝えていくことが大事。そうなることが理想だけど、そ

の1歩がまだ踏み出せない子たちもいるから、この場を活用しながら手ぶらでも参加できる環境をつくることもありかもしれない。

【小林委員】

ショップにとってすごく良い営業チャンス。道具持っていない人たちが自分のお店で買ってくれたら、ショップは協力するメリットになる。ショップが体験会を企画し、道具を持ち込んでスクールを開催するなど、ショップの協力を呼びやすくなる。

【田中委員】

ショップにとって購入してもらえるところも魅力だが、レンタルとして貸し出すということも魅力の一つ。特にBMXは価格が高いため、乗りたいときにメンテナンスされたものが乗れることは利用者にとってもメリットがある。

【鎌田委員】

協力してくれるショップへのフォローが大事。Win-Winな形にどうコントロールするか行政の力も必要なのかと思う。

【小林委員】

他のスポーツ施設などと同じく占有ルールが決まってくると思う。占有できるか不明だが、するとなれば行政の運営方法で公平性を担保できると思う。

【佐藤会長】

今年度、設計をしていくのだと思う。今のご意見で、建築事務所にオーダーを出せるか。アバスポさいたまやスクールキャラバンで、きっかけをつくり、ステップアップしてみたいという方をターゲットとし、やや難易度のある可動式のセクションを設け、ダンスの方々が広く場所を使うこともできる多様性を持ったフラットなところを用意しておくイメージか。フラットの部分の表層をどうするか、舗装①がパフォーマンスや競技をやるところで、舗装②がつなぎとなっているが、「こうしといた方が良いのではないか」といったような意見はあるか。

【田中委員】

前回も話をしたかもしれないが、ルールの看板を作るとしたら舗装①以外では滑らないでねというルールができると思う。でも同じ材質などで滑りやすかったら滑ってしまう。例えばゴムチップにするなど、車輪モノが滑りづらいような状態にし、ルールを自然に守らせてあげるようこちら側で配慮する考え方もあると思う。

【事務局】

資料3ページ目のおり、舗装面以外については滑らないものが良いという意見などもあったので、それを参考にプランを作成していきたい。できあがり次第改めて個々に相談させていただきたいと考えている。

【田中委員】

自転車置き場が必要になるかと思う。車は三橋総合公園側だとして自転車も三橋総合公園側になるのか。

【事務局】

駐輪場はこちら側に作った方が良いのではないかという公園側の意見もあるため、駐輪場スペースを設ける考えである。

【小林委員】

設計図面で、救急車の導線を考えてほしい。舗装①舗装②の間のところにベンチがあるが、奥の舗装①ですぐに動かさないような方が倒れてしまったときにそこまで救急車が入れるような想定をしてもらいたい。舗装①から出口までストレッチャーで負傷者を運ぶ必要があるときは車輪モノが逆に止まってしまうと運びにくくなるため、救急搬送するときの車両通行と負傷者の搬送の仕方について、レイアウトを考えていただきたい。先ほどの体験会等の実施に当たりレンタル用具の積みおろしをする際に、敷地に車を置いておくところがないと、一時的に接道に停車する状態になり交通の妨げになる可能性がある。車1台くらい中に入れるようにフェンスを設置し、荷下ろしするようなエリアを考えておいた方が良いかと思う。夜間は監視カメラもなく、管理者もいないため、入出場管理と車両の出入りのしやすさを兼ね合わせるところは、設計の方に頼るところかと思う。

議題- (3)

公民連携について

■ 資料説明

事務局より、資料5に基づき説明

■ 意見交換

【佐藤会長】

まず目指す公民連携組織というのを、我々が共有しないと意見も出てこないと思うので、質問みたいな形で、どんなものを目指しているのかをイメージしていただきたい。もちろん、ご意見等でも構わない。

【橋本委員】

氷川参道の整備を目的とした市民団体の委員を公募し、歩道や立木の整備を進めてきた。当初は知識や経験のある大学の先生などが先頭に立っていたが、段々と地域の人が参加し進んできた。いくつかの市の審議会や委員会に出ているが、一番積極的に意見を言うのは公募型。いろいろと発言は出るかもしれないが、良い提案があると思うので、それで進めていくのが良いと感じた。ショップとの連携という話があったが、三橋総合公園で看板立てるわけですよ。注意書きの看板みたいな。例えばそこにショップの広告を入れる。そうすると費用もショップから少し提供してもらおうなど、連携もできるのではないかな。

【佐藤会長】

この組織に今後、これまでやってきたほとんどのことを委ねていくというイメージで良いのか。資料に「新規事業の実施」とあるが、アバスポさいたまやスクールキャラバンは、市が継続していくつもりなのか、それともこの組織に委ねていくようなイメージなのか。それも含めて考えていくことなのか。

【事務局】

現状イメージしているのは、既存事業の拡充というところも含め、アバスポさいたまやスクールキャラバンの取組も、公民連携組織の活動の一つとして任せていくということになる。

【佐藤会長】

おそらく今の各種事業は相当市の持ち出しになると思うが、組織を作った場合、かなり利益を上げないと今の事業は運営できないぐらいの費用なのか。

【事務局】

図の「一部資金協力」というところは、今の時点でこれぐらいと決まっているものではない。今後市の予算がこのまま維持できるかどうかも分からない中でのイメージになる。実際にどれぐらい収益を上げていかないといけないかということも、今の時点ではそこまでの数字は出させていないが、状況を見ながら市の資金協力も考えていくことになる。

【佐藤会長】

そうすると既存の組織イメージ図を右側の図にしていくために、どのように人を集めるかが課題となる。集めてきた人が右側の図になるが、それぞれの種目が連携していくという考え方や、スケートボードの中に初心者向けの係の方がいたり、コアの人たちを支援したりする係があるような考え方も生まれてくるかと思う。まず、組織をどうするかと、組織に関わる人をどう増やしていくかが課題だと思う。橋本委員から公募の方が一生懸命やってくさる方が集まりやすいという話があったが、ショップにも協力者がいるだろうという考え方もあった。人を集めて組織運営をしてくれる人を育てていく上で、ワークショップの企画についても説明があったので意見をいただけたらと思う。

【鎌田委員】

右の図に、将来像のイメージとしてSSCが主体となる形は、現状の形と変わりはないかと思うが、SSCはどこを担っていく形になるのか。それぞれのスケートボード、BMX、インラインスケートなどに対応してまとめていくのか。

【事務局】

競技ごとに中核を担っていただくことも想定しているが、組織全体の運営についても現状は想定している。

【鎌田委員】

連携組織は競技の振興を広げていくためのものか。質の向上というところで教える方たちも向上していく部分もあり、人材の育成という部分もあるが、アバスポさいたま・スクールキャラバンという取組を、ここで達成しつつそれ以上のものを作っていくための組織なのか。

【事務局】

はい。

【佐藤会長】

ある競技は、普及までで良いと考えるところもあるかもしれないし、ある競技は将来有望な人を見つけてアスリート育成をしたいというような競技が出てくる可能性もあるかもしれない。その足並みをそろえる必要があるかどうかは、早いうちに決めておくのか。それともこれから先の流れの中で考えていくことなのか。子どもと一緒に来たお父様お母様も何かのアーバンスポーツをやって、スポーツ実施率を上げていきたいという施策があるということは動かないことだと思う。ところが各競技の方にこれを投げかけると、まず競技を普及させたい、次に、その中から優秀な選手を輩出していきたいという気持ちになり、完全に離反するものではないが、足並みが揃わない可

能性があると思う。その調整役が、SSCになると思うが、その方向性を全部この組織に委ねて良いのか。それとも、ある程度は資金を出すつもりである市の施策というのもあり、市のお考えも絡んでくるのかなと思うが、いかがか。

【事務局】

まず市の方向性としては、基本的な対象を初心者と子育て世代の親としてスポーツを実施してもらうことにあり、裾野を広げていく活動がこのアーバンスポーツ活性化事業である。アスリートを育てていくという形ではなく、アーバンスポーツを楽しんでもらう人達を増やす、スポーツ実施率を高めるところが基本になるため、その方向性をご参加いただく方には理解、納得いただいた上で、この組織に参加をいただいてスポーツ実施率の向上を目的とした公民連携組織の活動をしていただくことを考えている。

【佐藤会長】

選手強化ではないということで、そうすると組織をどうするか、手伝ってくれる人をどう増やしていくかといった観点で、また施策を考えていただくための様々なご意見をいただければと思うが、いかがか。

【岩原委員】

指導者育成は、子ども向けの指導者を求めるのか、それとも競技的に普及するための指導者を求めるのか、そういうのは決めるのか。そもそも決めていくべきなのか。

【佐藤会長】

事業に関しては、市からの補助金をもらってやることになるので、市の方向性はスポーツの裾野を広げたいという方向で、そのことを理解した上で、協力していただく。結果的にそれをきっかけに自分たちの事業に来ていただくことは止めることでなく、むしろそうなっても良い。スポーツを好きな子ども、その子どもと一緒に良い機会だから自分もスポーツをやろうという保護者、ひいてはまちが元気になれば良い。そういう目的も共有できる方を探して増やしていくためにワークショップを実施したいと思うところかと思うが、そこで何か具体的なアイデア、方策のご意見等があればと思うが、いかがか。

【橋本委員】

小学校チャレンジスクールの実行委員として様々なスポーツの体験を提供しているが、あくまでも安全に配慮した指導者であることを大事にしている。さいたま市がアーバンスポーツの普及をする上で、指導者は子どもにけがをさせないということが大前提だと思うので、そういう指導ができる人でないといけないと感じた。そうでないと普及自体が失敗してしまうと思う。

【田中委員】

何か指導するにあたって、どんな競技でも絶対けがはするし、けがの先に成功がある部分も正直あるが、競技の魅力や楽しさを知ってもらうことが必要。線引きをきちんとできる講師でないと成立しないということです。

【鎌田委員】

自分の子どもがけがをしないようにと思う親もいれば、もっと頑張ってもらいたいと思う親もいる。それは、それぞれの家庭の育て方、子どもが目指したいと思うか否かだと思うので、田中委員や橋本委員が言ったように、その入

口の部分のフォローだから、いかに楽しい現場を作ってあげられるかが重要。結果、今後続けていくきっかけ、そういったジャンルのスポーツに携わって、プロになりたい、世界に羽ばたきたいと思うきっかけになれば良い。あくまでもスポーツ実施率向上に向けた取組としてブレないのであれば、アバスポさいたまがきっかけで体を動かす機会につながったということが重要なので、そのためにこの組織をどうするのかを考えた方が良い。その先に、その中核を担ってくれる指導者育成の整備がある。子どもも楽しそうにやっているから親も楽しいみたいな空気感をつくれる方が必要。

【橋本委員】

最初は今言ったように、楽しくけがのないようにする。もう少し先をやりたいたったときには、次の段階にいけば良いことであって、入口は絶対けがのないように子どもが楽しく、やってくれることが大事。1回やってみて自分に向いてない、やってみたら違ったということはあると思うが、楽しかったから続けてみたいと思えるような指導を最初はしてもらいたい。

【小林委員】

この指導者の問題は、コンテンツの中身をどうするかということが一つと、もう一つは、有事のときに責任が取れる体制を取っているかということ。それは主催者側であれ事業者側であれ、そこは仕組み上必要だと思う。アーバンスポーツの指導資格は、有段者という技術の裏付けが指導資格としてある剣道と比べ曖昧なところが非常に多い。ただ、AJSAは公認指導資格を取る際に、オリンピック前からか、スポーツ庁のスポーツコーチングリーダーの資格を取らないと、AJSAの公認スポーツ指導者にはなれないと制度変更した。先ほどのお子様の件やけがの予防など、そういったところは各ジャンルの専門的な知識より、一般的な知識に当たるところ。さいたま市のスポーツ推進委員という制度や、埼玉県のスポーツ協会でのジュニアスタートコーチという講座があるため、行政と一緒に社会的に信用される取組に関わっていただけるのであれば、こういう勉強をしてください、こういう資格を受けてください、こういうものを知っておいてくださいというものが、一応タスクとしてあっても良いかと思う。ただ、1から10まで全員が資格を持っていないと関われないことにすると、裾野を広げるための指導者の確保が大変なので、例えば監修する人が1人現場にいる必要があることと、人を集めて何かやる時には橋本委員がおっしゃったみたいな危機管理ができる方、危機管理の基本は危険予測と安全配慮義務であり、そこはしっかりできる大人が、たとえスポーツの方はそこまで専門的な知識がなくても、監修者として入ってくることが体制の中でできてくれば、何か有事の際でもこういう人員配置をして、こういう体制をとっていたが、それでもやむを得ず起きてしまったから、保険適用という流れができる。仕組みとして、どういう形で社会的責任が果たせるかという部分で、その資格制度やシステムをどうするかは検討が必要かと思う。

【佐藤会長】

まとめていきたいと思うが、この右側の図からいくと、競技ごとの部門に精通している方は配置ということ、部門なので共通するところは何なのかをはっきりした方が良くと思う。今日話を聞いていると、それこそアーバンスポーツの普及であり、おそらくこの組織の名称を作り、規約規定等を作ったときに、ここにある共通理解は、競技普及強化ではないということに

なっているので、アーバンスポーツ振興みたいな上位の概念が出てきて、それを目的とした方法として、スケートボードがあり、BMXがあり、インラインスケートがあり、その種目が互いに協力してもらおう組織になってくると良いのかと思う。もちろん、人は複数の組織に所属しているため、各部門の方が別の組織において、良い人材がいたら、そちらに引っ張ってあげれば良いが、あくまでもアーバンスポーツによる、さいたま市周辺のコミュニティづくりという目的を持った組織の部門としてあるという組織図になれば良いかと思う。指導者は、つい強化に走ってしまうため、どうやって選んでいくかということで、2ページ目になるが、まず人を集めてその人をさらに理解してもらおう機会として、ワークショップがあると思う。計画として、できれば来年度ワークショップをしたいとなると、今年度に予算申請ということになるか。

【事務局】

はい。

【佐藤会長】

どんな人を集めて、どんなワークショップをやるのかといったような、ご意見を聞いておいた方が予算立てしやすいかと思います。まず、人に声をかけていくに当たり、先ほど公募という説明もありました。やれば出て来る可能性もありますが、どういうところに公募かけるかによって、全く気がつかなかったという人もいるかと思うので、まずは指導者等、ワークショップに来る人をどうやって見つけるか、アイデアやご意見をいただければと思う。

【松田委員】

右下の「ワークショップ参加者の募集」で、対象者はアーバンスポーツの活性化に関心がある人、スポーツの地域活性化に関心がある人、アーバンスポーツに精通している人としている。同じように見えて全然違う対象になると思うのですが、それぞれの対象者に届くように、周知していく必要がある。小林委員がおっしゃっていたようにスポーツの安全に関する資格を持っている方は、そういう方に届くように周知をしないと来ていただけない。地域活性化などに興味があり、チャレンジスクールなどをやっているボランティア精神を持っているような方に届くように発信していくためにどういう手段で発信していくのが大事かと思う。

【橋本委員】

ワークショップをやると、1時間2時間では終わらないぐらい時間を必要とすることが多い。そうすると、まず3時間ぐらいと考えた場合に、遠方の方は、時間も平日の午後にやることは出来なくなると思う。早くても夕方5時か6時ぐらいから始めて2時間か2時間半ぐらいで終わりにする、或いは土曜日、日曜日を使う。この研究会の委員の方たちの推薦がある方などを入れて、なおかつ手を挙げてくださる積極的な方に入ってもらおうと、上手く組み合わせて、どういう時間帯でワークショップをやるのかということ、ある程度決めてやらないと、せっかく手を挙げてくれたが、全然出席できないこともあると思うので、その辺はよく整理をした上で、募集かけた方が良い。

【小林委員】

人集めの技術的な話になるが、2ページ目の「ワークショップの目的」は行政側がワークショップをしたい目的であって、集めたい人が望んでいるトピックではないと思う。子どもがこれから始めたい、自分のスポーツを普及

したいという方は、ルール・マナーの啓発や公民連携組織の在り方と言われても、分からない人が多いと思う。そのため、例えば、先ほどの三橋も見沼もトピックとして出ているので、新しいスケートパーク整備に関する意見の募集など、参加して欲しい方が、意見を言いたい、考えを聞いて欲しいと思うような目的を書いてあげないといけない。1次的な募集と2次的な募集に分けた方が良いと思うが、例えば、1次募集でこういうパークに関する意見を募集する形で、公募でも良いから意見を集めて、そこで参加者の候補になりうる形のマトリックスを作ってしまう。連絡先を確保したら、ワークショップ参加の呼びかけをするという形で段階を踏んでいくと良い。いきなり人を集めて場を設けてやるのは、さすがにハードル高い。戦略的に人集めをしていけば、集められないことはないだろうと思う。1回で求めるターゲットが全部集まることはまずないので、集められるところから集めて、その中から芽づるで、参加できなかった方や聞いてなかった方たちも市内に増えていく、その中でベストな人材を選別していくことが大事だと思う。こちらから、指導者であるか、資格を持っているか、やる気があるか等を最初から提示するよりも、話し合いや意見を言ったことに対するレスポンスで、やる気を起こさせることもワークショップの役割ではあるので、参加したいと思っていただけるようなアウトプットに加工していければ、時間的な余裕もあるし、全然できるのではないかなと思う。

【佐藤会長】

行政の立場で「こういうワークショップをやりたい」という形になっているが、そうではなく、「三橋をどうしようかという話から始まり、ところで…」という感じで展開していく。「アーバンスポーツで地域を作っていくという目的なので、そういうことを考えてみませんか」という方向に引っ張っていく。

【小林委員】

私もSNSでさいたま市に住んでいる方のスケートボードの投稿などを見ているが、埼玉大学の近くでやっている子たちが、市は意見を全然聞いてくれないといった投稿しているのを見たことがある。おそらく、行政が話を聞きたい方たちの興味を引く呼びかけができてないということだと思う。例えば、さいたま市が、市内でアーバンスポーツをやっている方に対して、さいたま市でもっとアーバンスポーツを楽しむためにはどんな意見がありますかと募集したら、ジャンルに関わらず、我こそはという方が意見を寄せてくると思う。その中には、ここに載っていないような種目でも、たくさん意見を持っている方もいらっしゃるかもしれないし、やる気がある方もいらっしゃるかもしれない。1次募集として、どういう人たちがいるかを趣旨とした呼びかけを行うことは、すごく重要だと思う。最初からワークショップというよりは、ワークショップをするための戦略的な材料集めを、段階的にやった方が良いと思う。

【佐藤会長】

「残念ながら…」という人を拾ってしまう可能性もあるが、そういった場合には、それこそワークショップで、これだったら僕はもう参加しないよっという人も出てくる感じか。

【小林委員】

ふるいにかけていけば良いと思う。

【田中委員】

このワークショップの参加対象者は、競技の指導者的な位置付けになる人か。

【佐藤会長】

もうちょっと広いのではないか。むしろ、直接このスポーツは知らないけれど、イベントを作って子どもをいっぱい集めてみたいという人がいた方がおもしろいのではないかと思う。

【小林委員】

指導者や、ある程度こちらで意図している人材については、コアな方たちから芽づるで引っ張ってくる方が早い。ワークショップに参加する方は、市内の方たちで、やる気やポテンシャルを持っている方をまず集めてみるのが一番大事。指導者になっていくか、管理的な方になっていくか、ふるいにかけていなくなるのか、それは集めてみないとわからない。入口を狭くしてしまうと、化ける可能性があった方を最初から閉ざしてしまうことになる。まず集めてみて、ワークショップにおいて、それぞれの人がどういう意見をしたり、立ち振る舞いをしたりしているかを見るのがすごく重要。間口を狭くするよりは、実態が見えてから、後で呼びかける形で十分良いかと思う。

【田中委員】

講師についても、最終的には市民の中から出てきてくれて、そこで回っていくのが理想ということか。

【小林委員】

サッカーでチームの指導をやっていた方が出てきて、アーバンスポーツに興味あるとなったらすごく心強い。他の競技でも指導資格を持っている方やスポーツ医学をわかっている方が興味を持ってくれたら、すごく強い味方になる。集まった方のポテンシャルを見て、この分野のこの方はこういうことを任せられそうだと考えていくのが良いかなと思う。

【佐藤会長】

声のかけ方についてももう少し意見をいただくと施策がつくりやすいと思う。例えばということで今お話があったが、実際にスケートボード等をやっている方のSNSに、「さいたま市です」とは送れないと思うが、どんな方法が考えられるか。

【小林委員】

先ほどの、ワークショップの目的やタイトルを受け手側が知っているものにした方が良いというのが、その部分。BMXだったら、こういう内容だったら人が集まりやすいのではないか、インライン・スケボーならこう、というのがあろうと思う。私の考えとしては、パーク整備に関してご意見を募集しますというのが、ネタになりやすいかと思う。

【佐藤会長】

パーク整備がちょうど良いきっかけになる。

【小林委員】

そういった情報発信を市がしてくれれば、それぞれ影響力のある方に支援していただくことで、募集しているなら意見を言いたいという方たちを集められる。

【佐藤会長】

どこに情報を載せると一番広がりやすいか。やはりヒューマンネットワークか。

【小林委員】

特にアーバンスポーツは、プロスポーツのようにトップダウンのトーナメント式の広がり方でなく、メッシュ状のネットワークの広がり方をするので、口コミで拡散されていく形。誰かが言ったことを、同じチームの方がシェアをして、その外側がまたシェアしていく広がり。

【佐藤会長】

広く聞くという前提だが、最初の一歩は、市内にある団体に対して投げかけてみるという形か。市としては、そういった方法は問題ないか。特定の団体にのみ聞くというのはできないと思うが、いかがか。

【事務局】

広く広報する中で、個別にもお声がけをしていくことを考えている。

【佐藤会長】

さらに、ほかにも声をかけて聞いてみてくださいみたいな形も考えられると思う。

【橋本委員】

建物を建てるときに、私はよく地元の意見をちゃんと聞くように役所の方に話をするが、今回のように、作る前からこれだけいろんな意見を吸い上げているのは、稀なことだと思っている。さらに1歩踏み込んで、プレイヤーの皆さんの、こうしてもらいたい、ああしてもらいたいという意見を集めて、それに沿った形で整理ができたとしたら、利用者は大変喜ぶと思うし、本当に役に立つ良い施設になると感じている。ぜひ、その方向に進んでもらえればうれしい。

【佐藤会長】

それをきっかけに、普及のためのワークショップもいかがですか、という2段階の戦略みたいな形かと思う。時間となったのでここまでとしたい。事務局で今後作るネタとして、いくつか提供できたのではないかと思っている。以上をもって、本日の議事を終了する。

③ 閉会

(9) 問合せ先 スポーツ文化局スポーツ部スポーツ政策室
TEL 048-829-1737
FAX 048-829-1996